

異文化講演会報告

現代中国のまちづくり —広東省の「故郷」建設を中心として—

第41回講演会

2023年12月15日（金）に、異文化交流研究施設による第41回講演会が行われました。講師として東京大学立大学社会学部の河合洋尚先生を迎えました。河合先生は社会人類学を専門とし、これまで中国の漢族社会を中心に、都市空間、客家社会、華僑華人の研究を行ってきました。

中国はいまや世界で2番目の経済大国となり、10億人以上の人口を有し、日本社会とも多方面にわたって関係をもつ非常に影響力が大きな国です。ですが中国はあまりにも大きすぎるため、その実態を適切にとらえることは非常に難しいといえます。中国の人口は55の少数民族と漢族とで構成されていますが、漢族であっても北京、上海、広東で話す言語（方言）が異なり、少数民族となると、その実態はさらに複雑です。

また民族差、地域差はもちろんのこと、貧富の差や生活環境も多岐にわたるので、中国といっても一概に全体を説明することはできません。そこで河合先生は、中国社会を考察する際のひとつの（しかし重要な）手掛かりとして、「華僑とのつながり」という観点から議論を提供してくれました。

今回お話いただいたのは、中国南部の複数都市における「まちづくり」に関してですが、そのなかで華僑華人（中国から国外に移住した人々）が、故郷の「ま

ちづくり」に対し、さまざまなイメージを重ね、新たな景観や文化資源を生み出す状況が説明されました。たとえば広東省の梅県という街においては、日本との関係、潮州や台湾との関係、東南アジア諸国との関係、タイとの関係といった違いによって、それぞれ異なった景観が街のなかにも出現する様子がお話されました。

この他にも「まちづくり」の事例として、広東省の広州、四川省の成都、雲南省の紅河などが紹介され、地方政府や地域住民だけで閉じることのない、景観や文化資源の生成過程が説明されました。中国というと、中華思想という観点から、中国の中心部から周辺へと文明（漢字・儒教・民俗）が伝播していくというイメージが未だに根強いですが、マクロとミクロの両面から、文化にまつわる現象をつぶさに見れば、中国の中心から外へと出ていく力学のみならず、中国の外から中に入る力学も確かに存在し、今回はこうした観点から中国をとらえることの重要性をお話されました。

講演会には山口大学の学生はもちろんのこと、多くの中国人留学生も参加していました。加えて山口のみならず、他県からも一般市民の方が訪れていました。講演後の質疑応答も活発に行われ、講演会は大盛況のうちに終わりました。

（報告者：小林宏至）



発行

山口大学人文学部異文化交流研究施設

753-8540 山口市吉田 1677-1 TEL 083-933-5200(代) FAX 083-933-5273

<http://www.hmt.yamaguchi-u.ac.jp>

2024年8月1日